客観的臨床能力試験（ＯＳＣＥ）を受験して

◎三浦 歩[1)]、菅野 正彦[2)]
福島県立総合衛生学院 臨床検査学科 3 年[1)]、福島県立総合衛生学院[2)]

【はじめに】臨地実習前に、臨床技能や患者接遇などの学習効果を具体的に認識することを目的として客観的臨床能力試験（以下 OSCE）が実施された。また、試験終了後に受験学生の OSCE に対する認識を問うアンケート調査が行われた。今回の OSCE 受験の経験とその後の臨地実習の経験をもとに、アンケート調査の結果を学生の視点で検討したので報告する。

【方法】OSCE は最終学年である第３学年生 17 名を対象に、令和元年 4 月 23、24 日の 2 日間にわたって実施された。OSCE の課題は、血液検査、臨床化学検査、輸血検査、微生物検査、生理検査、検査管理の 6 部門について設定された。各部門の課題は 2 月下旬に公表され、3〜4 月が練習期間とされた。各部門の課題は、血液塗抹標本作製と血球の判読、総蛋白の測定、血液型判定、無菌操作と滅菌処理、肺活量と努力性肺活量測定、検査管理部門では身なりのチェックと手洗い、顕微鏡の操作法等であった。評価は、学内教員 6 名に外部評価者 6 名を加えた 12 名で行われた。全体の合否発表とフードバックは 5 月 8 日に行われたが、生理検査部門のフィードバックについては OSCE 終了直後に行われた。また、OSCE 終了後に受験学生を対象としてアンケート調査が行われ、その調査結果を分析した。

【結果および考察】OSCE の合否結果は、生理検査部門で 3 名が不合格となったが、他 5 部門は全員が合格であった。生理検査部門の再試験は 1 週間後の 5 月 15 日に行われ、再受験者 3 名全員が合格した。アンケートの結果は、「OSCE は必要と思うか」との設問に対して、「必要」との回答は OSCE 実施前で 24%であったが、実施後は 53%に増加した。「問題点に気付くことができたか」との問には、全員が「かなり多く気付けた」「ある程度気付けた」と回答した。また、フィードバックについては多くの学生が「十分参考になった」「ある程度参考になった」と回答しており、その効果が確認された。筆者自身も生理検査部門のフィードバックで多くの問題点を指摘され、その後の臨地実習では常にそのことを意識して実習に臨むことができた。以上のことから、臨地実習前の OSCE は臨地実習の教育効果をより向上させる契機になり得ると考えられた。